

4-13 里山

里山は私たちの身近にある森林で、古来より人が利用することで手入れがなされ、生活と深い関わりを持っていました。しかし、生活様式の変化により利用されなくなることで、里山をとりまく環境の悪化やそれに伴う里山生態系の変化が問題となっています。地域住民やNPO等による里山整備が展開されていますが、里山の持つ様々な機能を維持するために、資源の積極的な利活用が期待されています。

1. 里山とは

里山とは、一般に集落周辺に広がる森林で、かつては薪にするための木の伐採やマツタケの採取、水田や畑の肥料とするための落ち葉かきなど、人が長期にわたり手を入れ利用してきた森林のことをいいます。また、社寺の周辺にある鎮守の森、ため池、水田、集落等をも含んで広義に解釈される場合もあります。(図4-13-1)

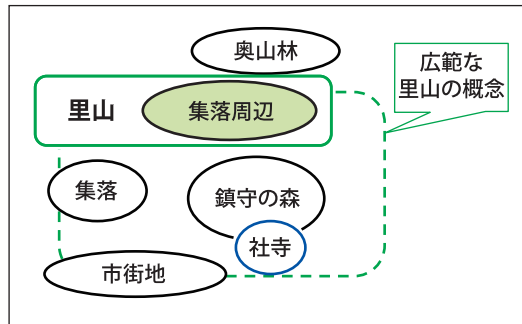


図4-13-1 里山の概念図

2. 里山のこれまで

古くから人々の生活と深い関わりを持っていた里山ですが、昭和30年代半ば以降、石油・ガス・電気、プラスチック製品、化学肥料等の普及により、従来のような活用がなされなくなってきました。

また、農山村においても農林業主体からサラリーマン化が進み、人々が次第に里山に入らなくなるとともに、住宅や工場等の開発により都市部に隣接した多くの里山が消えていきました。

さらに、残った里山も人の手が入らなくなったことから竹の侵入や植生の変化により昼間でも日が差し込まない「やぶ」になったり、ごみの投棄場所となることで、多様な動植物のすみかとしての働きが低下するなど、その多くが劣悪な環境に置かれているのが現状です。また、人の手が入らなくなった里山は、シカ・イノシシ等の野生鳥獣の隠れ家になることから、農山村における農林被害の拡大の一因にもなっています。

3. 里山の整備と利活用

このような里山も、景観的、社会的、文化的、教育的、健康的価値が見直され、地域住民やNPO、行政等による様々な取り組みにより整備されつつありますが、景観の保全や自然体験の場、環境学習の場などとしてだけではなく、野生動物との緩衝帯の機能、キノコやほだ木の生産、タケノコの生産、あるいは薪やチップ等のバイオマス利用など、人が利活用することによって健全な状態を維持することができます。

里山の多様な機能の持続的発揮のため、かけがえのない大切な地域資源として、里山を積極的に整備、利活用されることが期待されています。

4. 里山保全の取り組み

滋賀県では里山を保全し、活用するための取り組みを行っています。

(1) 里山リニューアル事業

荒廃している里山を手入れして、防災や獣害防止機能を高め、地域住民が安心して利用できる場所づくりを進めています。



写真4-13-1 地域住民による里山保全活動

(2) 県民参加の里山づくり事業

市町と里山保全グループと森林所有者が協定を結び、里山保全グループが継続的な保全活動を行えるよう支援しています。

(3) 「自伐型林業」の推進

森林所有者や地域の住民が、所有(管理)する山林を自ら整備する「自伐型林業」を支援し、資源の有効活用や森林保全の担い手確保を図っています。



写真4-13-2 滋賀県産のコナラ材で作られた椅子

(4) 広葉樹の新たな利用

里山にある広葉樹は燃料やチップだけでなく、材料としても利用することができます。近年里山が手入れされなくなり、生えていた広葉樹は大径化し、材料として使える大きさに生長しています。里山の整備を行い、伐り出された木材を家具や建材として利用する取組が進められています。

森林政策課・森林保全課